

消化器内視鏡会会長 奥島憲彦先生



Q1. 昨年の本誌3月号の分科会研究会からの報告コーナーでは沖縄消化器内視鏡会の活動などご紹介を頂きました。そこで今回は先生に直接お会いしてお話しをお伺いできる機会を作って頂くことになりました。初めに会長に就任されてこれまでを振り返って頂きますと、どのような感想をお持ちでしょうか。

○奥島先生 沖縄消化器内視鏡会は、開業医の先生を中心に昭和38年に発足しました。当時は熱心な先生方が沢山おられて、全国の一流の先生を招いて仕事を終えてから内視鏡の実技を指導してもらっていました。初めは胃カメラ同好会だったのですが、それから消化器内視鏡会になりました。

現在、会の活動の中心は毎月1回第4水曜日19時30分から沖縄県医師会館で例会をやっております。県内の病院が当番で毎回2例～3例の症例を持ちより検討をしています。毎回、勉強になる症例が多いのです。そういった会を続けながら5年おきに記念誌を発行しています。45周年記念誌は前会長の県立中部病院慶田先生が中心になって作っており、今年は50周年

記念誌を作る事になっております。

○出口先生 奥島先生は内視鏡会に入会されて何年くらいですか。

○奥島先生 25年ぐらいになります。それまでの時代は、歴代の会長大城毅先生、喜屋武朝章先生、幸地昭二先生、金城綱一先生、前田憲信先生、山内義正先生、佐久本健先生、高里良孝先生などほとんど開業医の先生方が通常の診療を終えて夕方頃から集まって、夜を徹して実技の講習をしたりと一生懸命会を盛り上げてきました。凄い情熱のある先生達です。

○出口先生 内視鏡会の歴史をお伺いしていると、県内の開業医の先生方の内視鏡の導入は全国的にみて早かったと感じますが。

○奥島先生 そうですね、早かったと思います。開業医の先生方が中心となって消化器の診断とか治療をやっていました。

○出口先生 普通、新しい医療技術とかは総合病院とか大学病院とかから入ってきて段々と開業医の先生方に入っていきようですが、本県の場合は違うようですね。

○奥島先生 おそらく、その当時は大学病院はまだできてなかったからかもしれませんね。県立病院はありました。その当時県立病院は救急が主体なので救急の内視鏡は発達していたと思います。開業医の先生が立ち上げ、その後琉球大学、県立病院、総合病院が主体となってきました。

○出口先生 奥島先生は11代目の会長にご就任されてから何年経たれたのでしょうか。

○奥島先生 1期2年なので今、1期を終えて2期目に入っています。

○出口先生 会長になられて変わられたことなどはありますか。

○奥島先生 毎回例会に出ないといけないので患者さんの具合が悪い時のスケジュール調整などで大変な所もありますが、見た事もない症例があり多くの事が勉強になります。最近の傾向としては20代、30代の先生方が積極的に参加するようになり、月によって差はありますが参加人数が20人から多いときでは40人参加して頂いています。また、若手の先生の積極的な発言を聞いていると色々な病院で診療に教育に頑張っている事を感じます。



Q2. 沖縄消化器内視鏡会における最近の話題などをお聞かせ頂ければと思います。

また、今後の展望や課題などについてもお聞かせ頂ければと思います。

○奥島先生 内視鏡はがんの早期発見、早期治療が大事な事の一つだと思いますが、早期のがんを一括で切除する技術が最近ようやく確立されてきて、ESD（内視鏡的粘膜下層剥離術）が最初に胃がんで発達してきたのですが、食道がんに適応になって、去年から大腸がんが保険適応になりました。大腸は技術的に難しい事があって最後に適応になりましたね。

沖縄県には県外のトップクラスの先生方が指導にいらしているので、そういう機会は結構多くて各施設で積極的に行われるようになっていきます。例会の症例に関しても難しい食道がん、胃がん、大腸がんのESDの症例が増えています。これは安全に技術的に確実にできる事が大事です、そこで「おきなわクリニカルシミュレーションセンター」に術達者の先生をお招きしてトレーニングが受けられるよう、当会が勉強の架け橋にならないといけないのではと思います。それが実現できたら治療のレベルの方もアップしていくと思います。

他に、診断技術も発達してきていて、NBI（Narrow Band Imaging：狭帯域光観察）という狭い波長の青と緑の光を当てて観察する方法があります。これは表面より細かい血管が緑、茶色として浮き出てきて微細な模様が浮き出てきます。例えば食道がんでは昔はルゴールをかけないと分らなかったのですが、色素をかけなくても瞬時に内視鏡の光をNBIに変えると見えやすくなる。特に頭頸部がんと食道がんの早期発見の発見件数が増えてきています。

○出口先生 県内でも増えてきているのでしょうか。

○奥島先生 県内でも少しずつNBI付きの内視鏡が導入されてきています。もうひとつは、拡大内視鏡が発達してきています。90倍に拡

大して血管網のパターンを読んで、悪性か良性か、これは粘膜がんとか粘膜下層がんとかの深達度診断が大まかにできてきています。内視鏡で病理診断までしていく流れにあります。これが今のトピックで、県内でもカンファレンスとかによくでてきます。微小血管の血液の流れが見えるのには感動します。

○出口先生 学術的、臨床的に話題を頂きましたが、会としてはいかがでしょうか。

○奥島先生 新しい活動はなかなか無いのですが、最近では若手が増えてきたのが大きいですね。もともと開業医の先生が中心でしたから、経験豊富な先生方からのアドバイスとか知恵は非常に重要ですね。やはり診断に関しては経験が物を言う事が多いですからね。

○出口先生 近年は認定医や専門医などの資格が増えてきていますが、資格取得についてはどうでしょうか。

○奥島先生 昔は指導医とか専門医が少なかったのですが、最近では琉球大学や総合病院の勤務医を中心に急激に増えてきています。とても心強いですね。これは単に資格をとるという事ではなくて高度の診断技術、治療技術を持った指導医が増えているのは最近の傾向かもしれませんね。

○出口先生 資格試験を受ける為に必要な知識とかそういった経験を積む為にも内視鏡会に入会して症例検討会にでるということは大きなメリットになるという事ですね。

○奥島先生 そうですね、学会に行く事も大事なことですけれども前会長の慶田先生も毎回例会に出てコメントで「こういう症例は初めて見た」とか、「珍しい症例にあって自分は来て良かったと思っている」という様な事をおっしゃいます。私自身も毎回参加していますが、忙しい時間を割いて行って、そういう珍しい症例を

見てディスカッションをする事で勉強になり、毎回行って良かったと思う会になっています。

○出口先生 会では沖縄県医師会館をよく活用していただいているとのことですが。

○奥島先生 以前は浦添の方でやっておりましたが、今は広々として勉強がしやすいような環境になってます。高速からも近いですので北部から参加される先生方にとっても非常に便利になったと思っています。内視鏡会が開催する講演会も会館を貸して頂いて集まりがよくなっている気がします。

○出口先生 最近の話題と言いますか、情報誌で見たのですが、内視鏡でフリーランスをしているドクターがおられて、何曜日の午前中はここの病院に行くとか、そのような仕事のやり方が出てきているようですが。

○奥島先生 これは資格があれば件数である程度の給料が出せるので、可能だと思えます。例えば子供さんがいる女性の消化器内視鏡医を採用して、この日の午前中だけでというのは実際に行われています。内視鏡も上部の内視鏡と下部の内視鏡がありますので、それが両方できれば申し分無いと思います。

○出口先生 女性医師の新しい仕事のやり方として内視鏡の資格をとってフリーランスをやるっていうのはいいかもしれませんね。それに最低限でも専門の資格がないといけないとい



う事ですね。

○奥島先生　そうですね。そういった契約は今後もできる領域ではないかと思えます。しっかりした診断技術と資格。それとカメラの検査は侵襲的な検査になるので患者さんに辛い思いをさせない様に努力する事は非常に大事な事ですよね。それも魅力的な技術の一つなのです。

Q3. 症例の検討や技術の錬磨などの勉強会としての活動以外に、業績を纏めた記念誌を発行されたり、全会員施設のデータを纏められているなど研究や学術面での活動も活発に行われているようですが、この点についても聞かせ下さい。

○奥島先生　そうですね、先達が5年おきに記念誌を出しております。業績とかは琉球大学の金城福則先生にお願いし、各理事の先生方が例会の症例や資料を集めたりした後、特別講演をしていただいた先生の資料を掲載しています。

この記念誌にあわせて5年に一度は全会員に協力していただき疫学調査を掲載しています。前回は消化性潰瘍とGISTでした。今回1つはバレット食道です。今、GERDが増えているので逆流性食道炎がバレットをつくるのではないかという説がありまして、では沖縄の人ではどれ位の頻度なのか1年程かけて前向き調査をしています。2つ目は、胃がんの調査もおこないます。

○出口先生　前向き調査ですか。学術的に評価が高いですね。

○奥島先生　なかなか難しいですけどもね。そういう事をやる事が地域の内視鏡会としては意味があると思えます、沖縄県を網羅している訳ではないのですが大まかな施設は参加していると思えますので、意味があると思えます。

Q4. 新しい臨床研修制度が始まり10年目を迎えますが、それ以前と今では消化器内視鏡において資格の取得や教育において何か変化した事はあるでしょうか。

○奥島先生　昔だと1年目ですぐ消化器内科、消化器外科に入って研修をして、2年目くらいから内視鏡を触って2年目の終わりにはかなりの内視鏡ができるようになっていました。今は3年目から始めます。技術修得のスタートは遅くなりますが初期研修で色々な科の勉強ができるというのはいい事だと思います。

○出口先生　初期研修では内視鏡の手技は実際にはやらないという事ですね。

○奥島先生　検査には付きますけども実際に患者さんに施行するという事はないです。

○出口先生　それならシミュレーション教育などはどうでしょう。

○奥島先生　そうですね大事だと思います。出口先生がおっしゃっていたおきなわクリニカルシミュレーションセンターは研修医も使えるのでそこを有効に使っていけばいいですね。特に診断もそうですけれども治療内視鏡に関して整備がされてくれば有用だと思います。治療に関してのシミュレーションモデルはまだ少ないのでそういうのも対応してもらえたら非常にいいと思います。

○出口先生　そうするとシミュレーションセンターをフルに活用して、先生方が行かれて指導されるということですね。

○奥島先生　そうですね、内視鏡会がリーダーシップをとってセミナーとかができるといいですね。

Q5. 県医師会や各会員に対するご要望などがございましたらお聞かせ下さい。

○奥島先生 新しい会館ができてとても助かっています。今後は会に病理医に参加して欲しいと考えています。以前、浦添の会館で症例検討会をやっている時は医師会にプレパラートを持ってきて投影する器械があって、病理の先生が参加されていました。そういう器械を今の医師会館に置いて欲しいですね。皆でプレパラートを持ってきてディスカッションしたいですね。

あと、第4水曜日の午後7時半から医師会館で例会をしております。当番が決まって症例を提示するのですが、医師会・内視鏡・消化器の先生方で困った症例などがあれば優先的に検討する事になっています。時々持ってこられる先生もいますので飛び入り参加で構わないので是非参加して下さい。

○出口先生 それは内視鏡会員じゃなくても大丈夫ですか。

○奥島先生 大丈夫です。いろんな病院のベテランの先生もいますので解決策が必ず見つかると思います。

それと、今はまだ僕だけしか沖縄でしていませんがPOEM（内視鏡的筋層切開術：Per-Oral Endoscopic Myotomy）という食道アカラシアの手術があります。腹腔鏡の手術では3本4本腹部に穴をあけてやっていたんですが、ESDの技術を利用しています。食道粘膜を切開してスコープを粘膜下層に入れてトンネルを胃までつくります。次に内輪筋を切開してクリップで閉じるので体表には傷が全くつきません。これまでにこの手術を5例しました。技術的になかなか難しいところもありますが、昭和医大の井上晴洋教授が開発したいい方法です。今後は先進医療に申請しようと思っていますので、医師会の先生方にも知って頂きたいと思っています。

Q6. このコーナーでは最後に座右の銘やご趣味、そして健康法などをお伺いすることになっています。奥島先生と言えばやはり剣道、そして琉大第一外科の講師をされていたころには、毎年、新人医局員や研修医を引き連れて那覇マラソンに参加されていた印象が強いのですが、ご近況なども含めてお聞かせ下さい。

○奥島先生 マラソンですが、出口先生もご存じのとおり外科医は忙しいのでなかなかストレス発散の方法がないのと、立っている仕事なので足腰を鍛えるのが必要だと考えて走り始めました。県医師会の宮城信雄会長は凄いですよ。会長はマラソンを3時間位で走るのですが、僕はギリギリの6時間かけて走るタイプです。でも10回くらい完走しました。何年前かに左膝の半月板を損傷してからフルマラソンは控えています。新研修制度が始まってからは、ハートライフ病院では自由参加ですが全員、久米島マラソンの10キロの部に参加しています。研修医の1期生はホノルルマラソンに連れて行きましたが、時間もかかるし「指導医がホノルルに行った事がないのになんで研修医がホノルルに行っているんだ」と凄いい叱りを受けました。それから2期生以降は久米島マラソンになりました。公立久米島病院はうちの初期研修医の研修病院の一つですので、村田院長にも前日に離島医療の講話をしていただいています。久米島では走る以外にシュノーケリング、バーベキュー、温泉にもは入り、楽しい時間を過ごしています。マラソンの成績はいつも僕が最後尾です。

○出口先生 剣道の方はいかがですか。

○奥島先生 ハートライフ病院に2年前にやっと剣道部ができました。4人しかいませんが、部長の當銘事務部長は7段です。女性の整形外科医の後藤先生は3段です。西原体育館で月1回稽古をしています。親川クリニックの親川先生、今井クリニックの今井先生など院外からの参加もあります。

○出口先生 以前、先生は大会によく出られていたようですが最近はどうでしょうか。

○奥島先生 今でも医師の剣道大会に毎年出ています。去年鳥取、今年は仙台であります。全国から大体100人ぐらい集まります。この試合は勝ち負けを争う勝負ではなく、拝見試合で互いのレベルに合った人と試合をして最後に優秀選手、優秀試合を選びます。去年の鳥取の大会では全く予想していなかったのですが、優秀選手の1人に選ばれました。6人くらい選ばれるのですが、皆凄い人が多いです。

○出口先生 県内医師会には剣道部はあるのでしょうか。

○奥島先生 沖縄県の医師剣友会があります。2ヶ月に1回県立武道館でやっています。棚原恵教八段にご指導をお願いし、沖縄県剣道連盟の七段の先生も多く参加します。こちらも人数が少ないのですが豊見城中央病院の整形外科部長の永山先生、西崎病院の名嘉佳代先生、南部徳洲会病院の赤崎院長、琉大医学部の剣道部も来ています。

○出口先生 本日はお忙しいところインタビューに答えて頂きましてありがとうございました。

